



| | |
|------------------|---|
| Title | 巻頭言 |
| Author(s) | 大竹, 政美 |
| Citation | 教授学の探究, 29 |
| Issue Date | 2015-01-30 |
| Doc URL | http://hdl.handle.net/2115/57883 |
| Type | bulletin (article) |
| File Information | AN10116428-29-0.pdf |



[Instructions for use](#)

巻 頭 言

大 竹 政 美

まず、われわれの基本的な研究方法論を確認しておこう。

教授学を、学校教育の陶冶（知的・技術的形成）の側面の法則性を追求する科学と規定する。自然科学教育・数学教育においては、自然科学的・数学的諸概念の、授業における形成の法則性を明らかにすることが基本的課題となる。

研究の手続きは、次のとおりである。

- ①現代科学の最も一般的・基本的な諸概念を、子どもが認識可能な形で連関づける。

[大域の（global な）順序モデルの設定；指導体系全般の基礎をなす、“公理”の選定がなされる]

- ②位置づけを与えられた個々の概念に関して、授業の中で子どもがたどるべき認識過程を、教材の構造と教授過程を統一したもとの教授プログラムのレベルにまで対象化する。

[小域の（local な）順序モデルの設定；その概念を相対的にミクロな諸概念に分析し、“整合的”に秩序づける]

- ③その教授プログラムを授業にかけて、子どもからの審判を受ける。安定した成果が得られるまで修正を重ねる。

[指導過程の検証、確定]

ここで注意しなければならないのは、指導体系は所与のもの、できあいのものとしては存在していないということである。大域のレベルにおいては、さしあたり、それぞれの現代科学はそもそも何かという科学論的な吟味によって、その中で最も基本的な概念の抽出と連関づけを行なったうえで、小域のレベルでの諸々の指導過程の確定を経てはじめて、子どもの認識発展の論理を提出することができる。

小域のレベルに関わっては、科学的概念の形成にあたって、子どもたちのあたまの中には何か具体的なよりどころ、あるいは確実に概念を形成できるメカニズムがあるのではないかと考えられている。それを高村泰雄は「実体的イメージ」と呼び、須田勝彦は「知恵ぶくろ」と呼んでいる。

以上のような構築の水準に応じて、歴史的現実の中での教育実践を解明することができる。

本号には、上記のような方法論に基づく、数学教育におけるまとまった研究成果を掲載することができた。憲法教育に関しては、目的・目標、大域の順序モデル、小域の順序モデルのそれぞれについて、まだまだ開拓すべきことがあるようだ。

いずれにしても、鈴木秀一氏の「若い人たち」への期待には応えていかなければならないだろう。